

地域・海外リサーチセンター：ふくしま浜通り未来創造リサーチセンター	
題目	「ふくしま浜通り社会イノベーション・イニシアティブ（SI 構想）」の具体化と社会実装
著者	松岡俊二、永井祐二、李洸昊、任羽佳、Hua Yan、Lin Weiyi

1. 研究の概要

福島における復興と廃炉に関する調査研究を、地域住民と多様な専門家とが協働して実施し、長期的・広域的な観点から復興と廃炉の将来像の選択肢を広く社会へ提案してきた。このことを通じて、2050年に持続可能な福島浜通り地域社会の形成を目標とした社会イノベーション（社会変革）を創造し、日本社会の再生を目指している。

2. 2024年度の研究開発、成果

2024年度も「福島浜通り社会イノベーション・イニシアティブ（SI 構想）」をベースに、「1F 廃炉の先研究会」と「創造的復興研究会」の研究調査活動を行い、またそれにぶら下げる形で対話の場を設計した。研究会と対話の場は、相互に刺激を与えつつ、双方を高度化させてきた。



「1F 廃炉の先研究会」では、1F の事故遺構保存や燃料デブリの試験的取り出しに関する技術的・社会的検討をはじめ、「地域の中の廃炉」という視点から、1F 廃炉マネジメントに対する市民的関与やガバナンスのあり方を考察した。1F 廃炉という複雑かつ専門的なテーマに対しては、理解と熟考のためのプロセスとしての対話が不可欠であり、1F 地域塾では「1F 廃炉と事故遺構の保存」や「多様な将来像の探究」をテーマに、世代・立場・地域を越えた学びと「対話の場」を実践した。

「創造的復興研究会」では、「除去土壌の再生利用」や「津島の歴史文化と復興」などのテーマを通じて、原子力災害の教訓をどのように社会的価値や文化的資源へと昇華していくかを探究した。また、住民参加型環境アセスメントや、地域資源を活かした新たなビジネス・観光の可能性を議論し、地域再生における

多様な担い手と価値創造の方向性を明確化してきた。加えて、それらの議論をより実践的かつ継続的に展開する場として、「福島再生塾」を新たに設置した。福島再生塾は、学術・行政・市民がフラットに対話できる場として構築し、地域再生モデルの検討や関係人口型コミュニティの可能性を多角的に掘り下げる機会となった。

「ふくしま学（楽）会」では、引き続き福島の復興と未来に関わるテーマを深めた。第14回および第15回ふくしま学（楽）会では、「高等教育機関の創設と人材育成」や「原子力災害の記憶と教訓の継承」などのテーマが取り上げられ、分野や世代を越えた多様な主体による対話と協働の重要性が再確認された。特に、「学びの場」としての機能を有しつつ、未来世代と共に議論する構成が高く評価された。

また、本学の学生が「1F 地域塾」、「福島再生塾」、「ふくしま学（楽）会」に参加し、福島浜通りを訪問・視察する機会を通じて、原子力災害を自分ごととして捉える「境界知」的視点を体感的に獲得しつつある。こうした経験は、学生の中に災害復興と地域再生をつなぐ新たな役割意識を芽生えさせるものであり、人材育成の観点からも重要な成果と評価できる。



3. 2025年度の研究計画

次年度は、「1F 廃炉の先研究会」+「1F 地域塾」、「創造的復興研究会」+「福島再生塾」を軸として活動を継続する。福島再生塾では、津島地区での住民参加型環境アセスメントを実施し、地域と協働した意思形成の場を深化させる。事業の節目を見据え、地域との連携や継続的な仕組みづくりについても検討を進める。対話と学びの共同体（learning community）を広げ、地域主体による復興を支援する。